

1 令和 6 年度 全学 FD 活動概要

1-1 本学FD活動の概要

本学では平成20年度、「金沢大学FD委員会規程」（後掲：4 資料編）に基づき、教育企画会議に全学のFD委員会を設置した。

FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、

授業の内容・方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究、研修等の自発的取り組みをいう。（金沢大学におけるFD活動指針第2）

FD委員会は、平成20年度に「金沢大学におけるFD活動指針」（後掲：4 資料編）をまとめた。同指針はFD活動が継続的かつ実質的に改善するために、FD活動をいわゆるPDCAサイクルの中に位置づけている（図1）。その一環としてFD委員会は各部局等が毎年度作成する報告書に基づき、当該年度の全学におけるFD活動に関する報告書（「年度報告書」）を作成することとした。この規定に基づいて作成したものが本報告書である。

本報告書では、各部局等が令和6年度の活動に対して行った自己評価のみならず、令和7年度における改善に向けての取り組み予定についてもまとめている。これらの点について他部局等の状況を相互に確認し、FD活動を相互に促進しあうことで、本学全体のFD活動が継続的かつ実質的に改善することが期待できる。

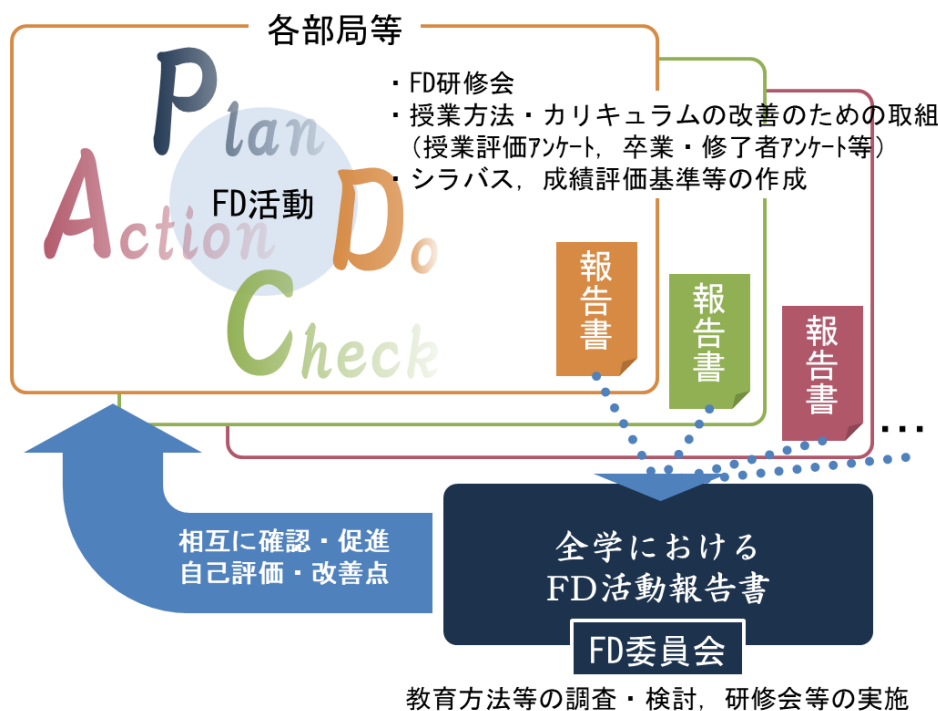


図1 金沢大学におけるFD活動

なお、同指針の特徴の1つとして、授業の内容や方法の改善に関することにとどまらず、学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等、学生支援に関する活動をもFD活動の中を含めている点が挙げられる。この点に関連して、本学では教育企画会議学生生活委員会を中心に「学生支援・学修支援」に資する目的で『教職員必携 学生サポートガイドブック』を毎年度、見直しを行い、アカンサスポータルに掲載している（図2）。その内容は学生相談、留学生支援、キャリア支援、障がい学生支援等、多岐にわたっており、教職員は本冊子を有効に活用することにより、学生が抱えた問題を早期に解決し、すべての学生が「充実した学生生活」が送れるように、学生支援に努めている。

また、教員のFD活動支援や学生支援の分野で、職員の果たすべき役割はより一層大きくなりつつある。こうした現状に鑑み、職員のSD（スタッフ・ディベロップメント）及びBSD（バックアップ・スタッフ・ディベロップメント）活動についての指針を盛り込んでいることも同指針の特徴の1つである。

ところで、同指針では、教学マネジメントセンターがFD及びBSD活動に対して必要な支援を行うことを定めている（「金沢大学におけるFD活動指針」第8）。教学マネジメントセンターが令和6年度に行ったFD・BSD活動及び他部局等のFD・BSD活動に対して行った支援の内容については「1-5 教学マネジメントセンターの活動」において述べる。



図2 教職員必携 学生サポートガイドブック

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

本学は、学則第3条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価（以下「自己点検評価」という。）並びに授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行う」と定めている。また、「金沢大学におけるFD活動指針」（以下、FD活動指針）においては、研修及び研究につけ加えて、「改善に向けての取組みを、計画・実践・評価・改善のサイクルの中に位置づけ、より組織的かつ継続的に行うことにより、実質的な改善へと繋げて」といくとしている。この指針を受けて、全学および各部局は、これら学則、「FD活動指針」等に基づきFD活動を推進している。

計画・実践・評価・改善のサイクルとは、学類、専攻ごとに、①学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、卒業・修了時における到達目標を明確にする、②ディプロマ・ポリシーに沿ってカリキュラムを体系化し、各授業科目の役割をマップ及びツリーという形で可視化する、③各授業科目のカリキュラム上の位置付け、教育内容・方法・到達基準をシラバスで学生に伝達する、④授業科目および教育プログラムの達成状況を、成績分布・授業評価アンケート・学修ポートフォリオ・卒業・修了者アンケートで確認する、⑤それらの分析結果に基づいて、各授業科目の教育内容・方法の改善、教育プログラムの改善を行い、部局におけるカリキュラム（マップ及びツリー）を再検証するというものである。

令和5年度から、FD活動報告書の効率的かつ効果的に構成する観点に立ち、各部局への照会事項を厳選した。併せて、各部局等のFD活動の掲載について、照会事項単位での掲載を改め、各部局単位での「FD活動計画」➡「諸活動チェック」➡「自己評価」という改善向上サイクルを重視する観点から部局単位での掲載とした。令和6年度においても、様式の体裁を一部改善を図った。

各部局のFD活動を事実に基づき確認するため、「令和5年度FD活動報告書」に記載した当該年度の自己評価・総評及び令和6年度に向けた改善計画に沿いながら、「照会事項1 シラバス改善のための取組みの実施状況」、「照会事項2 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況」、「照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況」、「照会事項4 FD研修会の実施状況(本学主催)」、「照会事項5 令和6年度FD活動の自己点検及び総評」の5項目について照会した。以下に、それらについての回答を点検した結果について述べる。なお、項目によって回答母数が異なる場合もある。

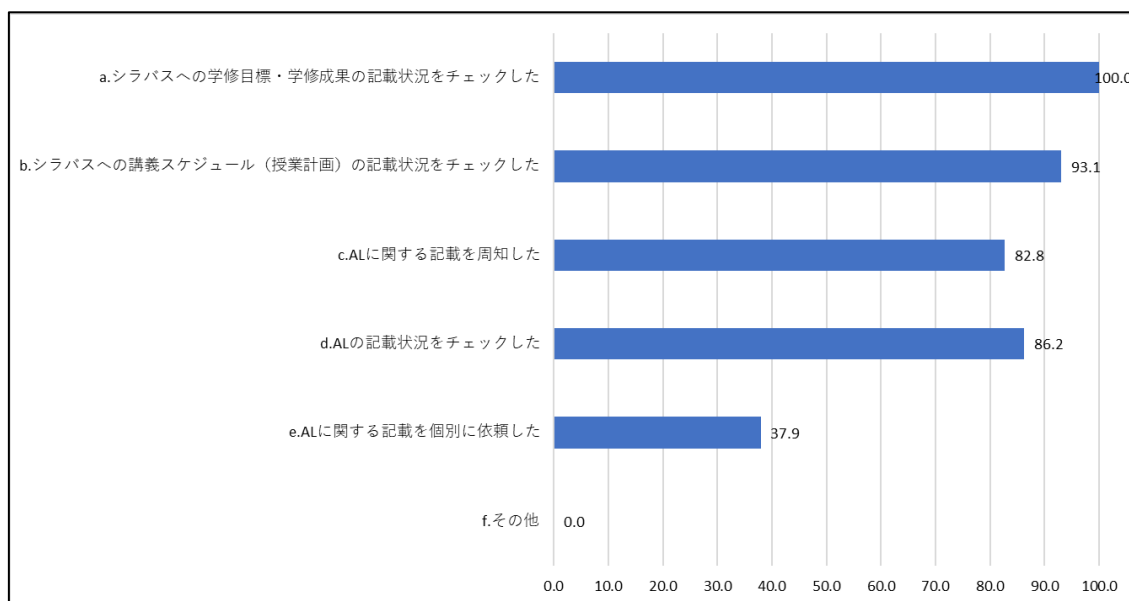
照会事項1 シラバス改善のための取組の実施状況

【検証事項1】令和6年度の実施状況

1) シラバスの基本的項目の点検

シラバスの点検については、基本的項目と英語化関連項目の2つに分けた設問を設定した。基本的項目としては、「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」、「AL（アクティブ・ラーニング）に関する記載を周知した」、「ALの記載状況をチェックした」、「ALに関する記載を個別に依頼した」、「その他」のチェック欄を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表 1-2-1 のとおりであるが、シラバス作成における基本項目である「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」については、前年度より改善が見られ、全部局がチェックした。また、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」については、前年度同様に、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科がチェックしていない。シラバスのチェック体制は改善されつつあるが、引き続き、改善に努める必要がある。



図表 1-2-1 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

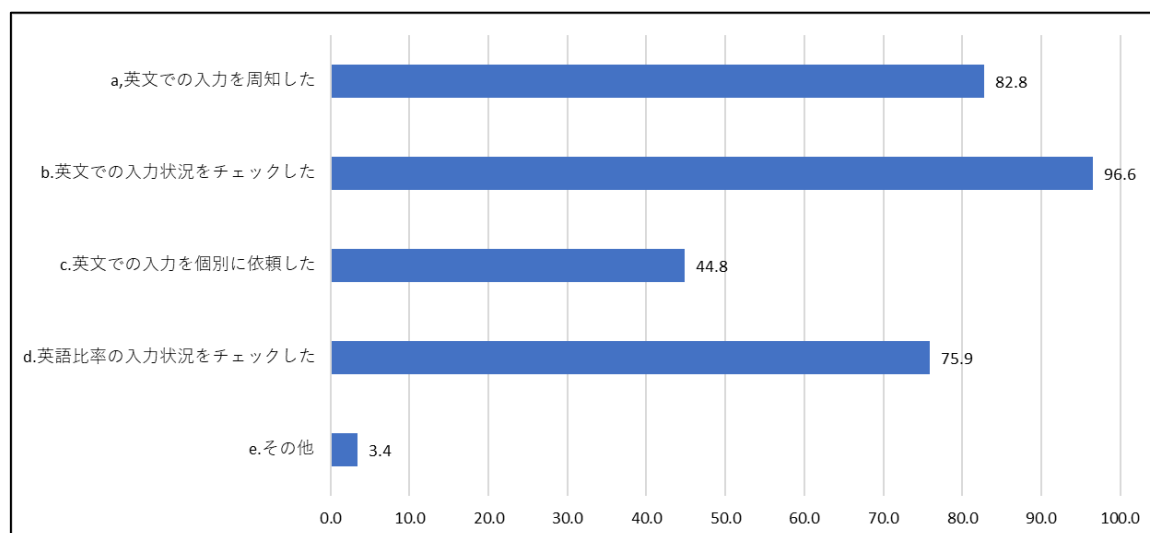
2) 授業科目の英語化の点検

次に、英語化関連の設問として、「英文での入力を周知した」、「英文での入力状況をチェックした」、「英文での入力を個別に依頼した」、「英語化率の入力状況をチェックした」、「その他」についてのチェック欄および具体的内容について回答する形としている。

各項目のチェック率は図表 1-2-2 のとおりであるが、「英文での入力を周知した」については地域創造学類、機械工学類・機械科学専攻、フロンティア工学類・フロンティア工学専攻、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科、「英文での入力状況をチェックした」につい

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

ては国際基幹教育院（GS 教育部門）がチェックしておらず、引き続き、改善に努める必要がある。



図表 1-2-2 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

通常のシラバス点検および授業英語化シラバス点検については、毎年度の定期的な作業として定着する傾向にあるが、各種ヒアリング調査等を通して明らかとなる実態は、入力されているかどうかのチェックに留まっていて、シラバスの記載内容に踏み込んだチェックについては、依然として改善の余地が感じられる。また、多くの学類でシラバス点検について、学類会議、教務・学生委員会などを中心に組織的に確認している一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことは今後の課題であると考える。

照会事項２ 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況

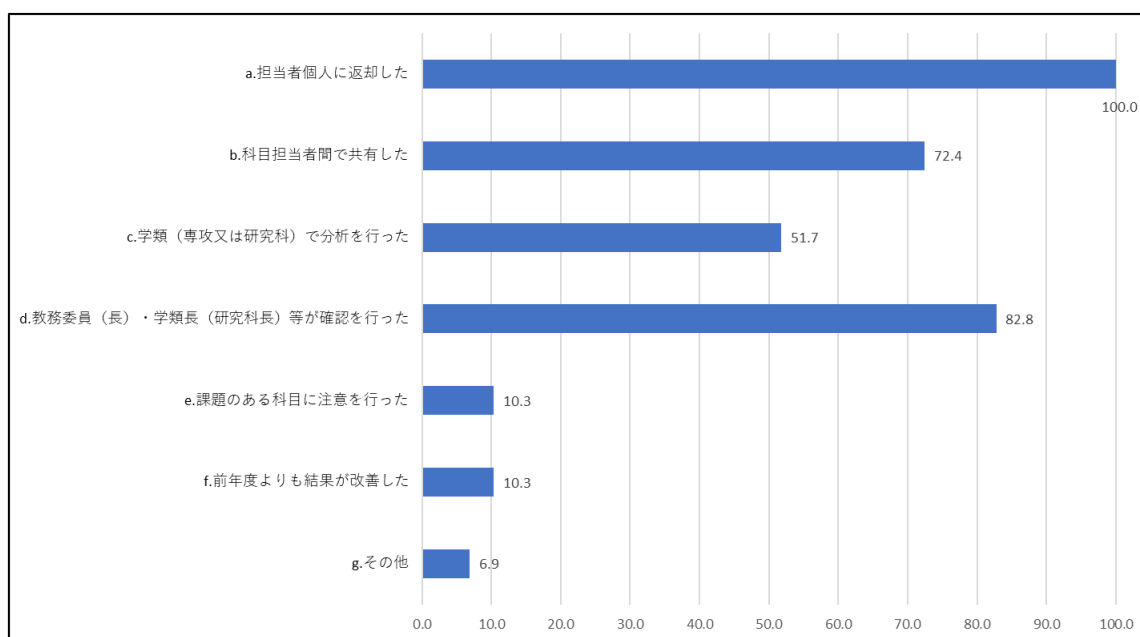
【検証事項１】授業評価アンケート及び卒業・修了者に対するアンケートの結果を、授業方法・カリキュラムの改善のために、どのように活用したか。

１）授業評価アンケート

授業評価アンケートの結果をどのように授業改善に活用したかでは、「担当者個人に返却した」、「科目担当者間で共有した」、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-3 のとおりであるが、「担当者個人に返却した」が 100% となっているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」にチェックが入っている。今後、さらに、授業評価アンケート結果の利活用を促していく必要がある。

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検



図表 1-2-3 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：%）

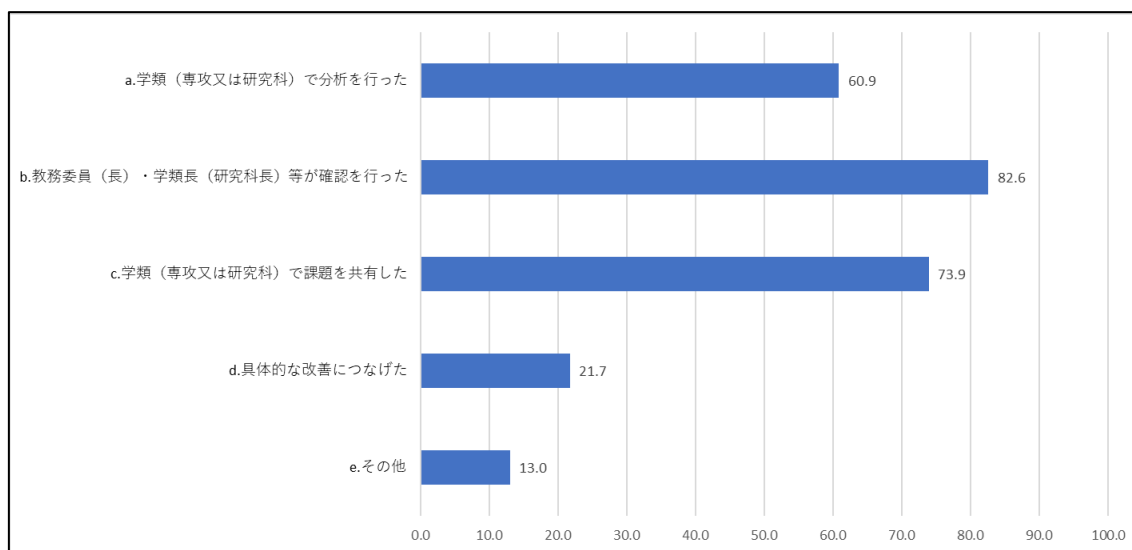
「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」で半数前後，「課題のある科目に注意を行った」，「前年度よりも結果が改善した」においては，少数の教育担当部局でしか実施されておらず，さらなる改善を行う必要がある。

2) 卒業・修了者に対するアンケート

卒業・修了者に対するアンケートに関しては，「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」，「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」，「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」，「具体的な改善につなげた」，「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-4 のとおりであるが，人文学類，法学類，国際学類ですべての項目にチェックが入っているほか，多くの部局において「教務委員（長），学類長（研究科長）等が確認を行った」「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」にチェックが入っている。全般的に，前年度と同様に，卒業・修了者アンケート結果の利活用が促進されている。

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検



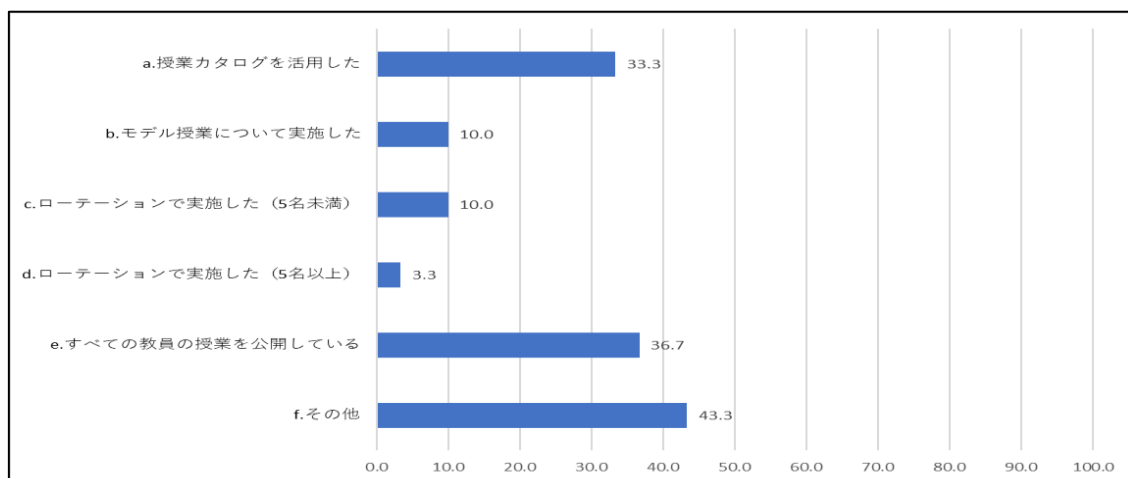
図表 1-2-4 各項目のチェック率（回答母数：23，単位：％）

卒業・修了者に対するアンケート結果の確認、共有は一定程度行われているが、具体的な分析や改善につなげるということについて課題を残している。

【検証事項2】教員相互の授業参観（遠隔授業の参観を含む）

遠隔授業の参観を含む教員相互の授業参観に関しては、「授業カタログを活用した」、「モデル授業について実施した」、「ローテーションで実施した（5名未満）」、「ローテーションで実施した（5名以上）」、「すべての教員の授業を公開している」、「その他」について回答を求めた。

「授業カタログを活用した」「モデル授業について実施した」「すべての教員の授業を公開している」について、一定程度の取組が見られるが、授業参観という形態でのFDには改善が必要である。一方で、ほかの設問への回答とは大きく異なり、4割の教育担当部局が「その他」にチェックをつけ、各部局特有の工夫を施した多様な取組について回答している。



図表 1-2-5 各項目のチェック率（回答母数：30，単位：％）

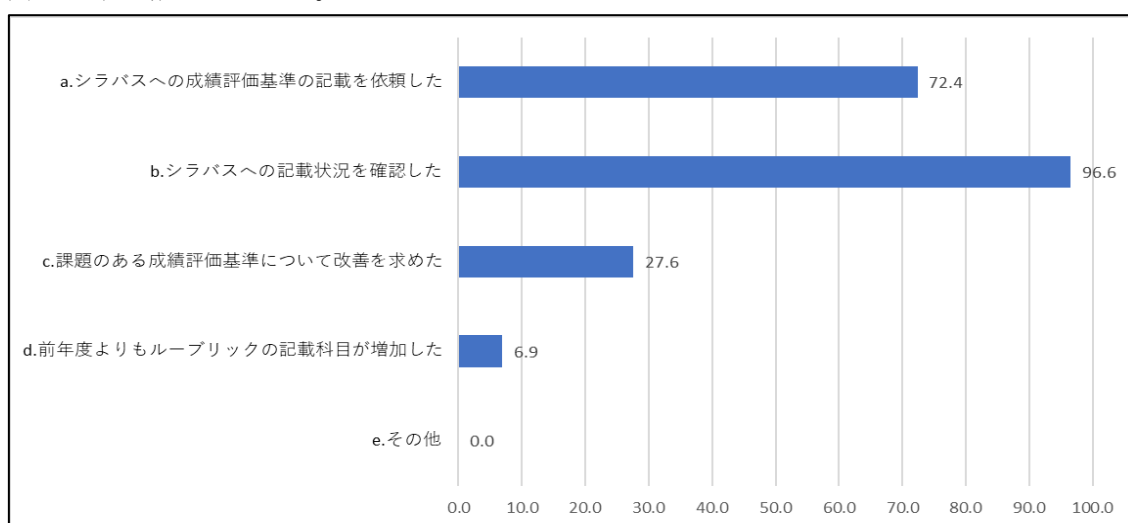
照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況

【検証事項1】令和6年度の実施状況

1) 成績評価基準等の作成・検証

成績評価基準等の作成・検証では、「シラバスへの成績評価基準の記載を依頼した」、「シラバスへの記載状況を確認した」、「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもルーブリックの記載科目が増加した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-6 のとおりであるが、人文学類、薬学類・創薬科学専攻・薬学専攻では、全ての項目にチェックがつけられており、成績評価基準に対する積極的な取り組みがうかがえる。前年度同様に、「シラバスへの記載状況を確認した」については、高い水準を維持している。



図表 1-2-6 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもルーブリックの記載科目が増加した」の数値が低い。ルーブリックについては科目特性の問題、既に多くの科目で記載されている可能性があるためある程度は仕方ないといえるが、課題のある成績評価基準については恒常的なシラバス点検体制の中で可及的速やかに改善されることが望ましく、FD として課題である。

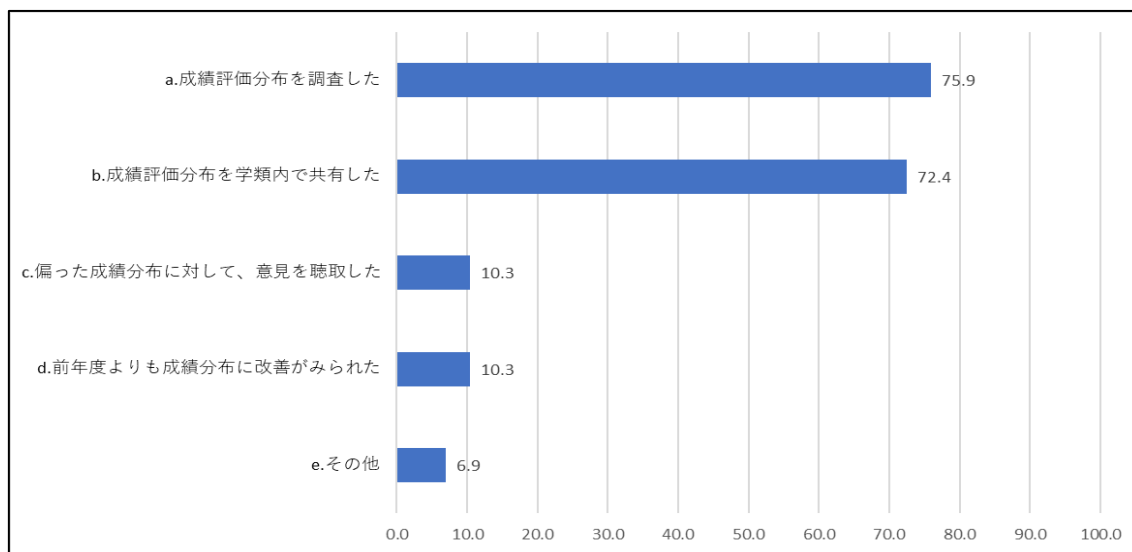
2) 成績評価方法の検証

成績評価方法の検証に関しては、「成績評価分布を調査した」、「成績評価分布を学類内で共有した」、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-7 のとおりであるが、国際学類、法学研究科（修士課程・専門職学位課程）では、全ての項目にチェックが入っており、成績分布への関心が高いことがうかがえる。一方、1つしかチェックのない教育担当部局も少数ではあるが存在していることは課題である。成績をつけるのは教員の専権事項ではあるが、あまりに偏りのある成績

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

分布は好ましくないという成績分布に関する認識共有を進める必要性が認められる。



図表 1-2-7 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

「成績評価分布を調査した」「成績評価分布を学類内で共有した」が高い数値を示しており情報共有は浸透していることがわかる。しかし、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」は1割程度、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」は2割満たない程度と低い数値となっており、成績分布に関する組織的関与に課題を残している。「その他」では、回答選択肢とは異なるが成績分布への異なるアプローチの工夫が行われていると思われる。

照会事項4 FD研修会の実施状況（本学主催）

融合学域、医学類をはじめとして、部局独自のFD研修会について、近年、充実が見られる。この傾向は、分野ごとにおける教育・学生支援に関する新たなテーマや課題が多いことを表していると言えよう。組織改組やカリキュラム改善等を行った部局においては、直面する新しい課題について、FD研修会のテーマに掲げられている。対面及びオンラインを含めた教授法、学修支援ツールの使い方、研究指導、学生のこころのケア、留学生対応など、幅広いテーマが話題となっている。これらの部局主催FD研修会の中には、教育、研究に関して共有可能なテーマのFD研修会については全学に公開・広報されることが望まれることから、教学マネジメントセンターにおいて共催支援、学内広報支援を行うケースが徐々に増えてきている。

今後の課題

今回、教学マネジメントの観点から、シラバスにおける学修目標・学修成果の記載状況、講義スケジュール（授業計画）の記載状況を新たに点検することにしたこと、さらには、卒業・修了者アンケート結果等を活用しながら、授業改善だけではなく、学位プログラムレベ

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

ルのカリキュラム改善に着目するようにしたことから、照会事項の改善充実を図った。それらを踏まえて、照会事項1～5の回答を総括し課題について指摘したい。

シラバス改善のための取組みの実施状況に関して、学修目標・学修成果、講義スケジュール、AL 関連の記載および英文での入力状況については大半の教育担当部局で確認が行われていた。一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られた。令和6年度下半期より教務委員会を中心としたシラバス点検体制を整備し、一層の改善充実に努めている。

次に、授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況では、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果を積極的に活用している教育担当部局があることが明らかになったが、授業評価アンケート結果で課題のある科目への対応が十分行われていないこと、卒業・修了者アンケート結果の分析、それを反映した改善活動が不十分であること、授業参観が不十分であること、課題のある成績基準改善が十分進んでいないこと、偏った成績分布への対応が不十分であること、など、今後の課題も見えてきた。

教員相互の授業参観については、Web上で確認できる授業カタログの活用は一定程度進んでいることが確認できたが、具体的な授業参観についてはまだまだ低調であることも判明した。ただし、授業参観以外の多様な形態での教員間での情報共有、情報公開は実施されていることが「その他」への回答から見て取れるため、今後の改善充実に活かしていきたい。

成績評価基準等の作成・検証状況に関しては、成績評価分布の部局内での共有は進んでいるが、偏った成績分布への対応が不十分な点が明らかになっている。このことは、成績評価に関する組織的な関与について、更なる改善充実を進める必要がある。

学修目標・学修成果を明確にしたシラバス作成、それに基づく授業実施および成績評価、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果による改善がよりよい授業を作る上でのPDCAサイクルであり、今後の改善が一層必要であることが、今回の照会事項への回答から明らかになった。

令和5年度に策定した「金沢大学における教育の内部質保証に関する指針」（後掲：4 資料編）に明記されているとおり、各部局からのFD活動報告は学位プログラムレベルや授業科目レベルのモニタリング機能として重要な位置付けとなっている。3つのポリシーを念頭においてカリキュラム改善、授業改善が一層進むよう、当該年度の自己評価及び総評、さらには、翌年度に向けた改善計画を通して、学生のためにより良い教育を提供できるように努めていく必要がある。毎年のように新たな課題が出てくるが、教育担当部局として学修者重視の姿勢の下、教員間での認識を共有し、課題、解決方法を組織として検討するという体制を構築・維持していくことが、自己評価4（大いに評価出来る）につながると考えられる。

1-3 FD委員会の活動

1-3 FD委員会の活動

令和6年度における活動		
令和6年4月4日	(木)	令和6年度第1回全学FD研修会「新任教員説明会＜教育・学生編＞」開催
令和6年7月4日	(木)	第2回全学FD研修会「文理融合・STEAM教育に関連した授業設計とは～教養教育、専門教育など多様な観点から考える～」開催
令和6年7月11日	(木)	第1回FD委員会開催
令和6年7月30日	(火)	第2回FD委員会開催（書面附議）
令和6年8月28日	(水)	知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）採択校合同企画「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン）～『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来～」開催 （「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）
令和6年9月27日	(金)	第3回全学FD研修会「イシューベースラーニングのすすめ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」開催
令和6年10月11日	(金)	「大阪大学における初年次少人数セミナー型導入科目「学問への扉」の有効性と課題」開催 （国際基幹教育院FD委員会主催）
令和6年11月1日	(金)	第4回全学FD研修会「FD活動報告書成果発表会」一学類等における組織的FDの取組事例ー開催
令和6年12月9日	(月)	「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」共通テーマ3 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024『文理横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える～文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援～』開催 （金沢大学、大正大学、新潟大学、早稲田大学主催）
令和6年12月25日	(水)	第3回FD委員会開催
令和7年3月6日	(木)	令和6年度文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）総括シンポジウム「新しい時代の大学教育につながるメッセージ ～DP事業が目指し、創り上げてきた成果～」 （「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）

- 各委員会の協議・報告事項及び議事要旨については下記にて公開している。
「アカンサスポータル」→「業務」→「業務マニュアル等リンク集」→「会議」→「学内会議の議事要旨等」
<https://manual.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.php/gakunaikaigi/>（学内限定）
- 各研修会（共催企画は除く。）の動画又は資料については本学ポータルサイト（アカンサスポータル）にて公開しているので、教職員は随時閲覧可能である。

1-3 FD 委員会の活動

● 【研修会】

令和 6 年度第 1 回全学 FD 研修会 「新任教員説明会＜教育・学生編＞」	
主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会及び教学マネジメントセンター
日 時	令和 6 年 4 月 4 日（木） 10 時 00 分～11 時 55 分
会 場	総合教育講義棟 2 階 A1 講義室
対 象	前年度研修会（令和 5 年 4 月 4 日開催）以降に本学に採用された教員を主とし、関心のある教員や学務系職員の参加も可能
参 加 者	64 名
概 要	新任の教員を主な対象とする全学の研修会は、平成 20 年度から毎年度開催している。従来は、「教養教育担当に関する初任者研修」（共通教育機構が実施、平成 16～18 年度）、「新任教員等研修会（兼共通教育担当に関する研修会（初任者対象））」（教育担当理事と共通教育機構長の連名で実施、平成 19 年度）として開催されてきた。 本学における授業支援体制と学生支援の取組を把握することで、教育体制全般に対する理解を深めることを目的とする。
プログラム	（1）アカンサスポータル及び教務システムの活用 （森 祥寛 学術メディア創成センター 助教） （2）学生指導と支援 （尾崎 紀之 学長補佐（入試・学生募集・高大院接続・学生支援担当）） （3）学生の心のケア及び学生相談（足立 由美 保健管理センター 教授） （4）FD 及びシラバス （林 透 教学マネジメントセンター 教授）
	
アンケート 結果 抜 粋	・企業から大学に移ってきたので大変参考になった。 ・配布資料は全て電子化して提供するのが良い。たとえば、教務システムや Webclass のような実際の運用のフェーズで色々と不明点が生じやすいトピックに関しては、実際にシステムを操作しながら作業できると、より身につくやすいかと思った。

第 2 回全学 FD 研修会 「文理融合・STEAM 教育に関連した授業設計とは～教養教育、専門教育など多様な観点から考える～」（「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）	
主 催	「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会
共 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会、教務委員会
日 時	令和 6 年 7 月 4 日（木） 14 時 00 分～16 時 00 分
会 場	Zoom によるオンライン開催
参 加 者	101 名
概 要	文理融合・STEAM 教育に関連した授業実践事例を紹介し、大学教育分野における文理融合・STEAM 教育のあり方について参加者とともに考えた。

1-3 FD 委員会の活動

プログラム	・基調講演「大学教育分野における文理融合・STEAM 教育の可能性～高次 STEAM と新たな社会課題～」 (講師：永井 由佳里 北陸先端科学技術大学院大学 理事（研究振興、社会連携担当）・副学長） ・事例紹介 「理数系分野における文理融合・STEAM 教育の授業実践」 (南保 秀隆 金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授) 「“泉鏡花×金沢アート” をコンセプトとした STEAM 教育の授業実践」 (林 透 金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長・教授) 「キャリアデザインを活かした文理融合・STEAM 教育の授業実践」 (山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教) ・意見交換・クロージング
アンケート 結果抜粋	・文理融合型教育を目指す上での種々の障壁について、どのように解決されているのか実践を通じて示していただき、勉強になった。

知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）採択校合同企画「未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン）～『知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）』が創造する大学教育の未来～」開催（「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）	
主 催	金沢大学（幹事校）、東京都市大学、新潟大学、信州大学、大正大学、麻布大学、千葉大学、早稲田大学、名古屋商科大学
日 時	令和 6 年 8 月 28 日（水） 13 時 00 分～17 時 15 分
会 場	東京都市大学世田谷キャンパス 7 号館 1 階 TCU ホール
参 加 者	85 名
概 要	新しい大学教育の未来イメージについて参加者とともに考えた。
プログラム	・オープニング：田口 亮 東京都市大学 副学長 ・趣旨説明：林 透 教学マネジメントセンター 副センター長/教授 ・未来思考型ワークショップ 2024（アイデアソン） (ファシリテーター：杉浦 正吾 東京都市大学 教育開発機構 教授， 山下 貴弘 金沢大学教学マネジメントセンター 特任助教) ・グループ発表・全体共有 ・クロージング ・情報交換会（名刺交換会）
	
アンケート 結果抜粋	・大学職員や学生などと、屈託ない意見交換ができた。なにより、教育機関の現場にいる方の生の意見を聞くことができたのが大きい。そして、そのような方々とともに同じビジョンを示せたことが嬉しかった。

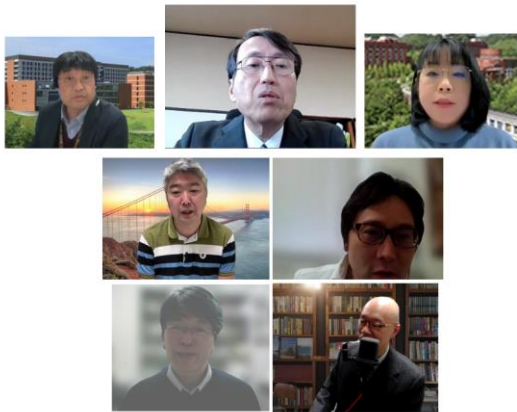
1-3 FD 委員会の活動

第3回全学FD研修会 「イシューベースラーニングのすすめ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」開催	
主 催	「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会
共 催	金沢大学教育企画会議専門委員会 FD 委員会，教務委員会
日 時	令和6年9月27日（金） 14時00分～16時00分
会 場	バイオマス・グリーンイノベーションセンター（BGIC）1階 ステップホールへの出席または Zoom によるオンライン参加
参 加 者	56名
概 要	金沢大学で取り組む融合学域や先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の実践事例を紹介しながら、イシューベースの学修の意義や価値について、参加者とともに考えた。
プログラム	・基調講演①「融合学域先導学類におけるプロジェクト演習」（尾島 恭子 金沢大学副学長（教育改革・企画評価担当）／教学マネジメントセンター長） ・基調講演②「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）における課題解決学習」（大同工業株式会社 人事部人事課 坂下 直樹 氏，ミミミラボ コーディネーター 吉川 永祐 氏） ・意見交換・クロージング
	
アンケート 結果 抜 粋	・企業と大学との取り組みは重要な学びの場である。受け入れ先企業の意欲もよく伝わった。

「大阪大学における初年次少人数セミナー型導入科目『学問への扉』の有効性と課題」	
主 催	金沢大学国際基幹教育院 FD 委員会
共 催	全学FD委員会
日 時	令和6年10月11日（金） 16時00分～17時20分
会 場	総合教育講義棟 A1 講義室
参 加 者	29名
概 要	現代の科学技術の急速な進展に伴い、社会は主体的に課題解決に立ち向かうことができる人材を求めている。この需要に応えるためには、大学教育において深い教養力の涵養と専門性のさらなる充実という一見相反する課題に取り組む必要がある。「学問への扉」は、大阪大学が1年次を対象に実施する少人数セミナー型の必修科目であり、全学全教員担当制で約250の多様なクラスが展開されている。学生は、異分野融合的な教養教育の出発

1-3 FD 委員会の活動

	点として主体的に授業を選択することができる。 この先進的な試みの工夫や直面する問題、今後の課題についての講演が行われ、実践的な知見を得る貴重な機会となり、活発な意見交換が行われた。
プログラム	「大阪大学における初年次少人数セミナー型導入科目『学問への扉』の有効性と課題」 (村上正行 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部 教授)

第4回全学FD研修会 「FD活動報告書成果発表会」ー学類等における組織的FDの取組事例ー	
主 催	教育企画会議専門委員会FD委員会、教学マネジメントセンター
日 時	令和6年11月1日(金) 10時00分～12時00分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	42名
概 要	金沢大学では、毎年度部局ごとの組織的なファカルティ・ディベロップメント(FD)活動について「金沢大学FD活動報告書」としてまとめ、公開することで活動の共有と振り返りを図っている。令和5年度FD活動報告書においては、学問分野の特性に応じた活発な取組を紹介しており、部局を越えて参考になる事例が多い。今回は、法学類、機械工学類、生命理工学類及び医薬科学類におけるFD活動を全学的に共有した。
	
プログラム	「FD活動報告書成果発表会」ー学類等における組織的FDの取組事例ー (ファシリテーター：林 透 教学マネジメントセンター 副センター長)
アンケート 結果 抜 粋	・日頃は所属組織のFDのことしか考えていないが、全学的な観点からFD活動の目指す方向が分かってよかった。 ・各学類の事情に応じて工夫して取り組んでいることが分かり、大変勉強になった。

「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」共通テーマ3 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2024「文理横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える」	
主 催	金沢大学、大正大学、新潟大学、早稲田大学
日 時	令和6年12月9日(月) 13時30分～17時00分
会 場	大正大学巣鴨キャンパス1号館2階大会議室への出席またはZoomによるオンライン参加
参 加 者	170名
概 要	DPでは、令和4年度から、当該メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲを横断した共通テーマ

1-3 FD 委員会の活動

	を 4 つ設定し、採択校 9 大学が各メニューを越えて相互連携することにより、汎用性ある効果を蓄積・発信することを目指している。このうち、共通テーマ 3「多様な学びを支援する方法及びシステムのあり方を情報交換・検討」をテーマに開催された。
プログラム	・基調講演①「分野横断の学びを豊かにするアカデミック・アドバイジングとは」 (清水 栄子 日本アカデミック・アドバイジング協会 会長/愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授) ・基調講演②「文理融合・STEAM 教育におけるピア・サポートの効果と可能性」 (松下 健 日本ピア・サポート学会 理事, 上越教育大学 大学院学校教育研究科 教授) ・採択校からの成果報告 (林 透 金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長 教授) (長谷川 隼人 大正大学 学修支援センター 専任講師) (上畠 洋佑 新潟大学 教育基盤機構 教学マネジメント部門 准教授) (早田 幸 早稲田大学 社会科学部 教授) ・パネルディスカッション「文理横断・STEAM 教育の時代における新しい学修支援」 (長野 重音 金沢大学 人間社会学域国際学類 3 年次) (富岡 沙和 大正大学 文学部人文学科 3 年次) (佐々木 真理也 新潟大学 経済科学部 4 年次) (柳原 百花 早稲田大学 社会科学部 4 年次) (清水 栄子 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授) (松下 健 上越教育大学 大学院学校教育研究科 教授) (ファシリテーター: 山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教)
	
アンケート 結果 抜 粋	・被支援者と支援者の間には責任者（教職員）が不可欠であるという話が印象的だった。学生が安心して支援できる環境をつくる責任を再認識した。 ・分野横断の学びを支えるアカデミック・アドバイジングにおいては、アドバイザーのみの尽力ではなく、全学的なサポートが必要なことが分かった。

1-3 FD 委員会の活動

令和 6 年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ〜DP 事業が目指し、創り上げてきた成果〜」(「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画)	
主 催	金沢大学 (幹事校)・新潟大学・信州大学・大正大学・東京都市大学・麻布大学・千葉大学・早稲田大学・名古屋商科大学
日 時	令和 7 年 3 月 6 日 (木) 10 時 00 分〜17 時 20 分
会 場	早稲田大学早稲田キャンパス 14 号館への出席または Zoom によるオンライン参加
参 加 者	192 名
概 要	文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」最終年度にあたり、総括シンポジウムを開催した。「教育が社会の価値観を変える力を持つ」ことを再確認し、今後の高等教育が果たすべき役割について意見を交わしたほか、参加者から寄せられた質問に沿って、「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ」に関する意見交換を行った。本事業が目指し、創り上げてきた成果を社会に広く紹介し、新しい時代の大学教育につなぐメッセージを届けた。
プログラム	・基調講演「知識集約型社会を支える人材育成が目指すもの」 (村上 雅人 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 監事／芝浦工業大学 前学長) ・分科会セッション ・総括パネルディスカッション (村上 雅人 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 監事／芝浦工業大学 前学長) (大西 実 京セラ株式会社 東京事務所長／産学連携推進部 責任者) (ファシリテーター：松本 美奈 東京財団政策研究所 研究主幹／教育ジャーナリスト) (尾島 恭子 金沢大学 副学長 (教育改革・企画評価担当)／教学マネジメントセンター長) (麻布大学 大学教育推進機構 教学 IR センター長／教授 菊水 健史) (早田 幸 早稲田大学 社会科学部 教授) (青柳 匠馬 新潟大学法学部 3 年次) (東京都市大学 理工学部 4 年次 加藤 凜香) ・パネルディスカッション (ファシリテーター：山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教)
	
アンケート 結果 抜 粋	・教育の質保証の重要性、グローバルスタンダードの重要性について、とても共感した。 ・各採択校の特徴を掴むことができ、内容は似ていないが、目指す教育のゴールは同じと感じた。

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

令和6年度における全学及び各部局等のFD活動は種々実施され、全学のFD研修会（前掲：1-3）及び各部局等のFD研修会（後掲：2 各部局等のFD活動）も多数実施された。その中で、特色あるFD活動を各々1つピックアップし、紹介する。

【学域等及び研究科単位】

学域（融合学域、人間社会学域、理工学域、医薬保健学域）、研究科（人間社会環境研究科、自然科学研究科、医薬保健学総合研究科）、国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動は次のとおり。

部局名	FD活動
融合学域	融合学域3学類は、融合研究域融合科学系に所属する教員が主となり教育担当していることから、FD活動は3学類合同で実施し、相互の連携を図り、融合学域としての教育組織体制を構築している。 令和3年度に融合学域先導学類を設置し、観光デザイン学類、スマート創成科学類を順次設置し、3学類体制となった。既存の学域・学類からの異動、新規採用教員等、教員も年々増加している状況で、融合学域の理念である「文理医融合教育によりイノベーションを起こす人材の養成」に向け、FD活動を行っている。 融合学域FD研修会は定期的に企画し、令和4年度7回、令和5年度10回、令和6年度7回と3年間で24回開催した。 また、令和5年度からは教員の研究シーズ紹介を定期的に実施し、各教員の研究内容、進捗状況等の紹介を受け、自身の研究との融合、共同研究につなげる可能性を探っている。
人間社会学域	令和6年度は人間社会学域として1回のFD研修会を実施した。 令和6年12月17日に「学類・専攻における教学マネジメントの要点 ～授業科目レベルと学位プログラムレベルの往還～」と題し、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授による研修会をハイブリッドで実施した（対面・オンライン出席者数：教員40名、事務職員1名）。
理工学域 自然科学研究科	理工学域・自然科学研究科では、3月25日14時30分からオンラインにて第16回理工FDシンポジウムを開催した。新型コロナウイルスの大流行以降、各教員は様々な授業形態のスキルを身に付けてきた。地震や警報時の緊急対応においてもオンデマンド・オンライン・ハイブリッド・ハイフレックスなどの授業形態で対応できるようになってきた。それらの講義形態の学修効果（学生の理解度）に関しては、よく分かっていないところが多いため各授業形態の学修効果を解析する試みが行われてきた。 様々な授業形態の中でどの方法を活用するかを判断するためには、各授業

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	形態の学修効果（学生の理解度）を把握することが重要だと考えて、令和5年度までは授業形態と学修効果について考えるシンポジウムを開催してきた。令和5年度までのシンポジウム内容を基に、令和6年度の「特別講演」では、様々な授業形態の中でも「反転授業」にフォーカスしてシンポジウムを開催した。参加人数は75名であった。 反転授業に実績のある山梨大学大学院総合研究部工学域 教授、及び教育統括機構 全学共通教育センター長を兼任する森澤正之先生に、「理工系専門教育における反転授業の実践と効果」という題目で特別講演をいただき、反転授業を実施する際のポイントを解説していただいた。具体的な実践方法の解説もあり、反転授業が学生の学びの深化に効果的であることについて理解を深めることができた。また、生成AIの教育への利用の例を紹介いただいた。講演後は活発な質疑応答が行われ、授業改善に向けて様々な知見を得ることができた。
医薬保健学域 医薬保健学総合 研究科	医学類FD委員会が主体となり、令和6年度には学内外の講師をお招きして、計11回の医学系FD研修会を実施した。研修会の主な内容として、多職種連携教育、アクティブ・ラーニング、人工知能（AI）などを扱った。令和5年度と同様に医療人材教育研究センターと連携し、医学系のみならず、薬学系や保健学系教員も参加可能なFD研修会とした。さらに、令和6年度より金沢学術アカデミーとも協働し、金沢医科大学にもFD研修会を開けたものとした。医学系および附属病院所属の教員がFD研修会の内容をいつでも確認できるように、FD研修会の資料や録画した動画をLMS「医学FD」上で共有している。また、FD研修会に年2回未満の参加であった医学系および附属病院所属の教員に対しては、オンデマンド教材の視聴とレポート作成を課してFD研修会への参加を促すという取り組みを継続している。
人間社会環境研 究科	本研究科では、FD活動を通じて大学院担当教員に新たに求められる運営知識、問題や課題の意識向上を目指している。 近年はアンケートを活用したFD研修会を企画してきた。令和2年度は大学院における遠隔授業と研究指導について、令和3年度はコロナ禍における外国人留学生の経験と困難について、令和4年度は大学院進学に関する意識についてアンケートを実施し、令和5年度は企業・各種団体が大学院修了者に期待することなどについてアンケートを実施し、FD研修会ではその結果と分析をめぐって討論を行った。令和6年度は人間社会学域と共同で学士課程学生の大学院進学意識に関する調査を学内ならびに全国において1000人規模で行い、その調査結果を基に文系大学院進学者を増やすための方策について議論した。これら調査により、従来は理系大学院修了者への期待と需要が高いと目されてきた分野でも人文社会系大学院学生への潜在的需要が高いこ

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	とが示され、それを現実化させるための方途について意見交換されたことは有意義であった。令和6年度のFD研修会（第2回）では、大学院進学率の高い他大学の事例報告をもとに、学士課程の学生への働きかけに関する今後の課題について認識を深めることができた。 また令和6年11月にはFD研修会（第1回）を兼ねて、本研究科で令和8年4月に予定している「データプライバシーエキスパート養成プログラム」開設に向けたシンポジウムを開催し、総務省統計研修研究官による講演と3研究域からの話題提供により、個人情報保護とデータサイエンスをめぐる潮流と諸課題に関する情報共有と意見交換を行うことができ、大変有益であった。
国際基幹教育院	国際基幹教育院では、外国語教育系とGS教育系が協力し、分野の多様性を活かした多彩なFD活動を展開している。令和6年度の活動で特筆すべきは、10月に外国語教育系とGS教育系が合同で行った「Open Class Week」である。教員間の授業参観については、外国語教育系では継続して行なっている一方、GS教育系では近年、実施していなかった。令和6年度は、異分野間の相互の学びの可能性を探るため、2系合同の試みとして、同じ期間（2週間）に参観日を設定し、29人の教員（外国語系は全教員参加）が合計55コマの授業を公開した。多くの教員が系を超えて複数の授業を参観した。後半には合同で懇親会を開催し、教授方法などについて活発な意見交換を行った。さらに終了後に簡易アンケート調査を実施した。この結果、相互の学びについて好意的な意見が多くみられた。特筆すべき点は、学問分野の垣根を越え、さまざまな授業の間に共通点があることが確認されたことである。つまり、教授法に関しては文理を超えて異分野間で共通する点が多く、これを深めることでSTEAM教育を推進することができる。これに加え、生成AIと教育についての研修会、英語授業の強化に向けた取り組みについても、共同で研修を行なっている。

【学類単位】

今回は、経済学類、学校教育学類、数物科学類、電子情報通信学類及び医学類で実施している特色あるFD活動を紹介する。

○経済学類

取組名称	外部講師招聘講演「教育や研究における生成AIの活用」並びに勉強会
開催日	令和6年12月19日13:00～16:00（内勉強会は、15:00～16:00）
参加人数 （概数）	講演会：経済学類 11名、他学類 3名 合計 14名参加 勉強会：経済学類 4名参加

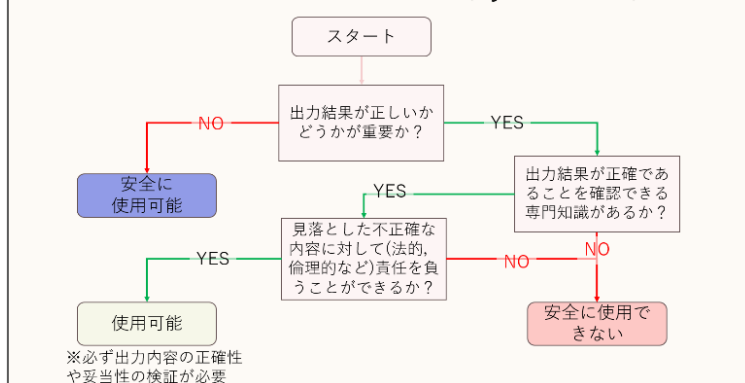
ニッセイ基礎研究所主任研究員の佐久間 誠氏を外部講師として招聘し、「教育や研究における生成AIの活用」の講演会と勉強会をFD研修と位置付けておこなった。

講演会では、生成AIに関する歴史を振り返り、生成AIの進歩が著しく、企業での導入は進んでいることから、教育や研究における生成AIの活用事例に基づき、教育現場や研究活動において生成AIをどう活用していくかについて聴講した。具体的には、生成AIの活用に先立ち、学生に自分の立ち位置を認識させるチェックフロー（図）の活用や他大学の学生の生成AI利用についての指針（表）などについて確認した。

勉強会では、講演会の話をもとに、レポートでの生成AIの使用の可否などについて具体的に議論した。

このFD研修後に、生成AIの使い方に関するパワーポイントを作成し、講義「アカデミックスキル」の教材として、経済学類全体で共有した。

生成AIを安全に使用できるのは？ (by UNESCO)



出所：UNESCO (2023), "ChatGPT and artificial intelligence in higher education: quick start guide"

図：生成AIの使用にあたってのチェックフロー

- 教育効果の重視
 - 思考能力向上のため、**知識生成・洗練化のプロセスが重要**。
 - AI生成物をそのまま利用することで、貴重な訓練機会を失う可能性。
- 不正行為
 - レポートや論文では、出典を明記し、**自分の考えを記載することが基本**。
 - AI生成物をそのまま利用することは不適切。
- 誤謬の可能性
 - AI生成物には誤りやバイアスが含まれる可能性。
 - 鵜呑みにせず、**自ら吟味・修正し活用する必要がある**。
- 法的リスク
 - AI生成物には**著作権や意匠権上の問題が生じる可能性**あり。
 - AIツールの利用時には、どのツールを使用したかの明記が求められる場合がある。
- 情報セキュリティ
 - 機密情報、**個人情報**、**未発表研究成果の**入力には**情報漏洩リスクがあるため厳禁**。

出所：<https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/docs/ai-tools-in-classes-students/>

表：「東京大学の学生の皆さんへ：AI ツールの授業における利用について (ver. 1.0)」の一部要約

○学校教育学類

取組名称	共同教育課程における金沢大学・富山大学合同FD研修会
開催日	第1回：令和6年9月26日10:00～12:00 第2回：令和7年1月16日10:00～11:00
参加人数 (概数)	第1回：金沢大学15名，富山大学20名 第2回：金沢大学25名，富山大学15名

本学類では，令和4年度より富山大学と共同教員養成課程を開始した。この課程では，1人の授業者が両大学に同時に授業を行う「斉一科目」の必修授業が設けられている。また，両大学の学生交流を促進するため，授業外活動として「エクスカーショ」も取り入れられている。本学類の特色あるFD活動の一環として，「斉一科目」（第1回研修会）と「エクスカーショ」（第2回研修会）をテーマに，遠隔システムを利用した両大学合同のFD研修会について報告する。

第1回の研修会では，「斉一科目における遠隔授業」をテーマに実施した。斉一科目とは，例えば金沢大学の授業担当者が，金沢大学の学生には対面で授業を行いながら，富山大学の学生にも遠隔で同時に授業を行う形式である。斉一科目に関するアンケート調査では，特に遠隔履修の学生から否定的な意見が多く寄せられた。これを受け，FD研修会では，能動的な学修方法に関して活発な意見交換が行われた。

第2回の研修会では，「エクスカーショ」をテーマに実施した。エクスカーショは，富山大学の学生が金沢大学の学生に富山を案内し，金沢大学の学生は富山大学の学生を石川に案内する小旅行型の交流活動である。学生アンケートでは，日程調整の難しさや経済的負担に関する懸念が寄せられた。そこで，研修会では実態の共有を行い，今後の課題について協議を進めた。



第1回合同FD研修会の様子



第2回合同FD研修会の様子

○数物科学類

取組名称	「情報・計算科学基礎」担当者談話会
開催日	令和6年9月27日
参加人数 (概数)	5名

FD活動として、令和6年9月にデータサイエンス応用系学域GS科目講義「情報・計算科学基礎」担当者で意見交換会を行った。この講義は主として数物科学類対象の講義であったが、学域GS科目になったことで内容の刷新を行うことになり、その打ち合わせをおこなった。

この講義は計算機プログラムの講義・演習を通じて計算科学の入門を行うものである。従来はUNIX環境をノートコンピュータに実装して、Fortran・C・C++などのコンパイラやEmacsエディターやグラフ作成ソフトGNUPLLOTなどの開発実行環境を構築し、基本的な数値計算を学習する「伝統的な」ものであった。しかし、数物科学類以外の学生も履修することになり、PythonとVS Codeを中心とした「現代的」な講義にしてはどうかという意見が出てきた。そこで、FD活動として担当者などが集まり談話会を開いた。

「数値計算言語としてPythonは適切か?」「VS Codeという、「枯れて」いないソフトウェアを教育に使って大丈夫か?」「Pythonプログラム作成課題ではChatGPTによるカンニングがあるのではないか?」などの問題が提起され、それらについて議論を行った。



○電子情報通信学類

取組名称	理工3学類合同FD研修会
開催日	令和7年3月26日（水）
参加人数 （概数）	44名

電子情報通信学類は、フロンティア工学類および機械工学類と合同で、毎年、FD研修会を実施している。

令和6年度は、学生実験における学生の能動的取り組みに関して、以下のタイトルの講演をオンラインで実施した。

タイトル：学生実験における「学生間ピアレビュー」の活用（講演者：電子情報通信学類・川江 健）

R6・理工3学類合同FD研修会

学生実験における 「学生間ピアレビュー」 の活用

電気電子工学実験第2（および実験第3）の実施例から
（電子情報通信学類 3年1Q2Q）

科目担当 松本 翼先生よりご提供

電子情報通信学系 R6・FD委員 川江 健

学生間ピアレビューとは？

Webclassマニュアルより引用



Webclassにある機能の一つで、**学生同士でレポート評価が行える。**
レポートのダウンロードや、点数およびコメントの入力ができる。

学生実験のレポート作成時に取り入れている「学生間ピアレビュー」に関して、実施形態およびメリット・デメリットを交えながら紹介した。さらに、電子情報通信学類内の他実験科目での実施例に加え、近年のコロナ禍を経て入学した学生の一部に見受けられる孤立の回避を指向した活用法などの利点と注意点についても紹介した。

講演後の質疑応答においては、本取り組みの実施に対するデメリットや履修者の利用率（当該制度の利用は学生の自由選択）に関する詳細について説明を行った。

○医学類

取組名称	多職種連携教育（IPE）の実践例と今後に向けて
開催日	令和6年7月22日
参加人数 (概数)	38名

本研修会は、医学類FD委員会と医療人材教育研究センターの協働により実施し、医学系および附属病院教員、薬学系教員、保健学系教員を対象とした。研修内容は、まず多職種連携教育（IPE）とは何かについての基礎的な説明から始まり、医学類における基礎系および臨床系科目で実践されている授業の事例を、3名の教員が紹介した。続いて、今後IPEとしての展開が期待される既存の医学類の授業について、具体的な提案が行われた。研修会を通じて、IPEのさらなる推進に向け、参加者間で共通の課題について活発な議論と意見交換が行われ、認識の共有を図ることができた。



地域アセスメントとIPE 今後の展望

本学では
4年生11月⇒5年生10月に地域医療実習を実施している。
地域アセスメント技術演習はこの中間にあたる4～5月に実施している。

地域医療実習 地域アセスメント 地域医療実習
11月 4-5月 10月

地域医療実習のテーマは
「行動科学・社会科学」であり、患者さんの生活者としての姿にフォーカスしている。
その患者さんが現在抱えるプロブレムに至るまでの背景や、そのプロブレムを抱えながら今後の人生と向き合っていくかを、生活史、思考、価値観、家族構成、生活環境などを考慮しながら、多職種の意見も踏まえて考察することを主課題としている。



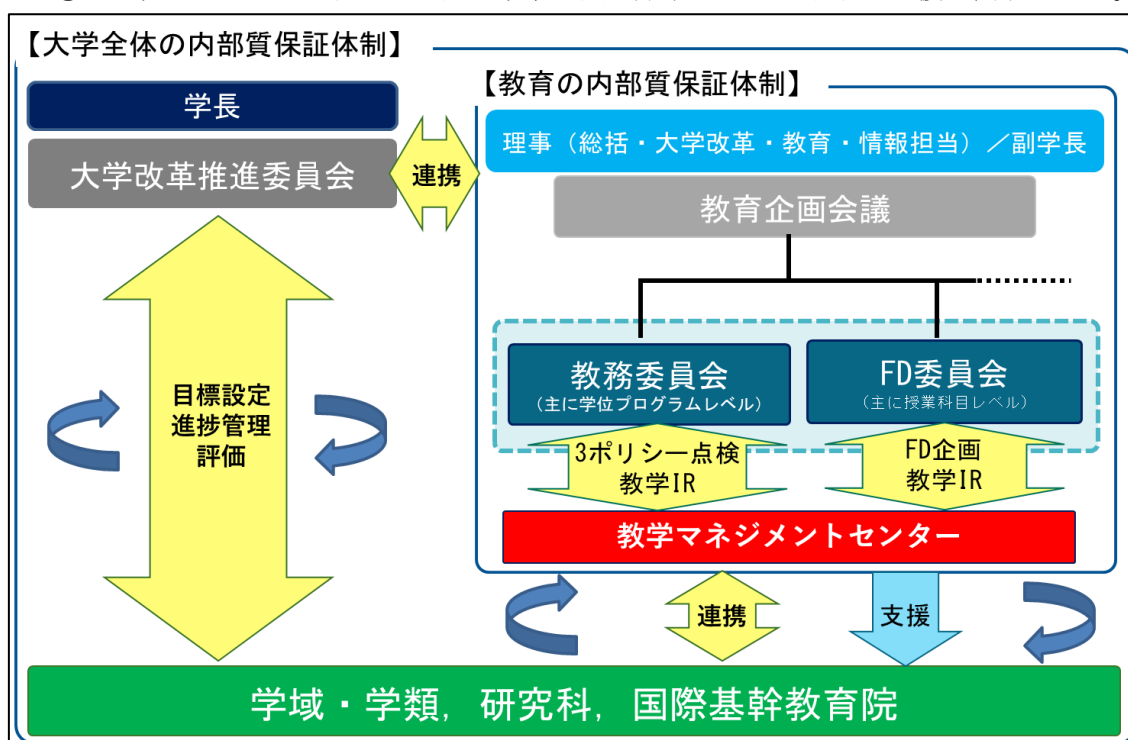
1-5 教学マネジメントセンターの活動

1-5-1 教学マネジメントセンターの業務概要

学長のリーダーシップの下、本学のFD支援、教学マネジメントを担ってきた国際基幹教育院高等教育開発・支援系及びICT教育支援を担ってきた総合メディア基盤センターを発展的に解消し、新たに令和3年4月に教学マネジメントセンター及び学術メディア創成センターを設置し、両センター連携によりFD、教学IR、教育DXを一体として推進する体制を構築した。学内のマネジメント体制強化のため、教育担当理事の下に置く組織として位置付け、学内の連絡・調整を円滑にするため、全学の教務委員長・FD委員長を務める学長補佐をセンター長に据え、センターの業務を掌理する体制とした。教学マネジメントセンター設置以降、教育の内部質保証体制の明確化の観点から、各種検討や学内調整を重ねつつ、現在は、図表1に示す組織体制において、日々の活動を行っている。

教学マネジメントセンターの具体的な所掌業務は、以下のとおりである。

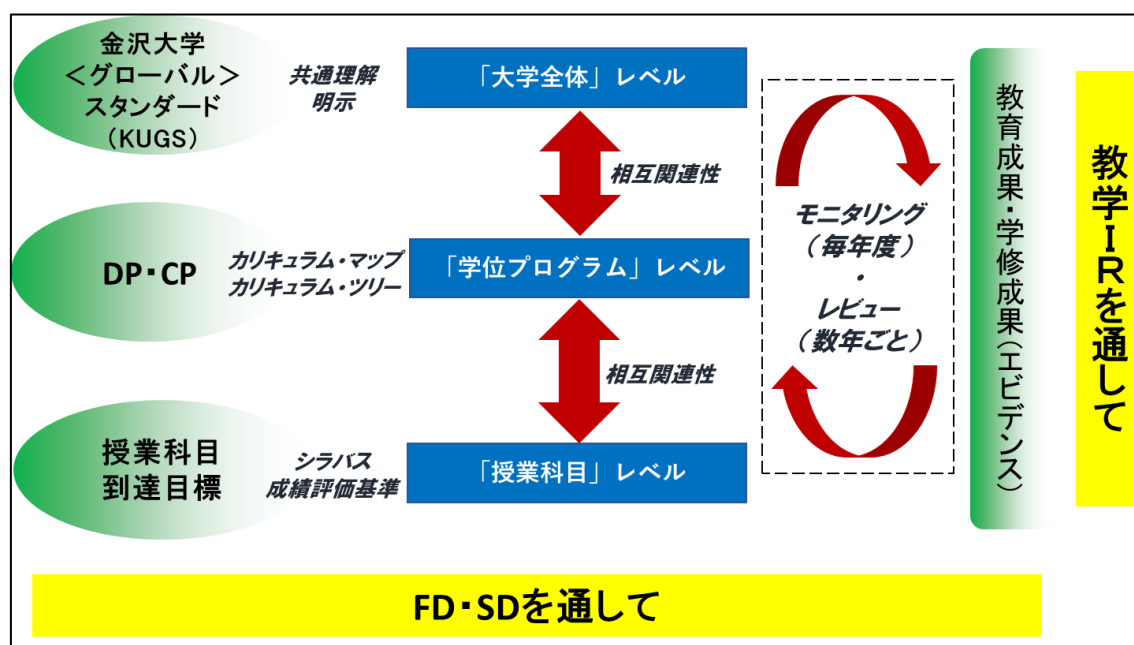
- ① 全学の教学マネジメントの確立、学位プログラム等における教育の質保証及び質向上に関すること。
- ② 教育方法、教育システム及び教育支援等に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発に関すること。
- ③ 全学的に取り組む教育事業及び分野横断的学位プログラムの企画立案、運営及び評価に関すること。
- ④ 教育スキルの向上に資する支援に関すること。
- ⑤ 全学のFD・SDの企画・実施及び学域・研究科等のFD・SD活動の支援に関すること。



図表1 教学マネジメントセンターの設置及び関係組織との連携体制

1-5 教学マネジメントセンターの活動

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表 2, 3 のとおり体系づけながら、各レベルに応じた FD・SD, 教学 IR の環境整備と具体的取組を進めている。



図表 2 教学マネジメントセンターが支援する教学マネジメントの枠組の概要図

項 目 レベル	教育・学修目標	改善充実のための機会 (FD・SD)	アセスメントツール (教学IR)
大学全体レベル (マクロ)	金沢大学 <グローバル>スタンダード (KUGS)	全学FD 新任教員説明会	学生生活実態調査 卒業・修了後アンケート
学位プログラムレベル (ミドル)	(各学類、専攻で定めた) ディプロマ・ポリシー (DP)	全学FD 学域・学類、研究科FD	卒業・修了者アンケート DP達成度自己評価
授業科目レベル (ミクロ)	(シラバスに明記された) 学修目標	全学FD 学域・学類、研究科FD 新任教員説明会 CLA研修	授業評価アンケート 成績評価分布

図表 3 アセスメントプランの枠組の概要図

1-5-2 FD・SD 活動の枠組と実績

令和3年度の教学マネジメントセンター設置以降、教育担当理事及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立ったFD・SD活動を行いながら、部局FDとの協働・連携・支援を行っていく必要があるため、「全学FD・SD」と「部局FD」の関係性について事項整理しながら、「全学FD・SD」で担うべきこと、「部局FD」で担うべきことを明確化している。

【「全学FD・SD」の役割と基本メニュー】

①「全学FD・SD」の役割

- ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
- ◆教職員として知っておくべき事項、遵守すべき事項の理解と共有
- ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
- ◆教職協働、教職学協働のための場づくり

②「全学FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表4 全学FD・SDの年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会，高度TA研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

【「部局FD」の役割と基本メニュー】

①「部局FD」の役割

- ◆各部局における主要事項の理解と共有
- ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
- ◆各部局における授業・カリキュラム，学修状況・成果の把握・検証
- ◆各部局における全学的課題の理解と共有

②「部局FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催でのFD活動について、以下の二つの区分に整理した。

ア) 個別テーマ型FD・・・部局における主要事項の理解と共有，部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として，当該部局が独自のテーマ設定により実施するFD

イ) 統一テーマ型FD・・・全学的課題の理解と共有などを目的とし，教学マネジメント

1-5 教学マネジメントセンターの活動

センター等が連携・支援しながら実施するFD
(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、
機関別認証評価で求められる学位プログラム単位のDP・CP、
カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・
見直しなど)

令和6年度全体のFD・SD実績は図表5のとおりである。FD委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学FD研修会に加え、先導STEAM人材育成プログラム(KU-STEAM)の周知を主な目的とした、教職学協働型のKU-STEAMランチョンセミナーを昨年度に続き企画実施した。また、高大接続コア・センターと共同主催した「探究・STEAMフェスタ」についても昨年度に続き企画実施し、高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。

また、教学マネジメントセンターでは、時機に応じたテーマを話題に、短い時間で気軽に参加・意見交換できることをコンセプトとした新たなFD・SDイベントとして、「FD・SDラウンジ」を2回企画開催し、いずれも好評であった。この新企画は、近年、高等教育を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、高等教育機関としてカバーしなければならないテーマや領域が多様化し広がっていることから、新しく対応すべきテーマを中心に、最新の情報や今後の方向性を情報収集・意見交換することを狙いとしたものである。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画として学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトに公開・配信している。

図表5 令和6年度FD・SD実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会	4月4日(火) 午前の部 4月4日(火) 午後の部	64名 101名
KU-STEAMランチョンセミナー	4月下旬～11月上旬 計8回開催	325名
全学FD研修会 「文理融合・STEAM教育に関連した授業設計とは ～教養教育、専門教育など多様な観点から考える～」	7月4日(木)	101名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)採択校9大学合同企画 「未来志向型ワークショップ2024(アイデアソン) ～『知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)』が創造する大学教育の未来～」	8月28日(水)	85名
第1回FD・SDラウンジ 「国立大学における探究型入試の今後の方向性」	9月9日(月)	21名
全学FD研修会及びKU-DPアドバイザーボード 「イシューベースラーニングのすすめ ～課題解決力や実践力を鍛えるための授業設計～」	9月27日(金)	56名 (学外公開)
全学FD研修会 FD活動報告書成果発表会	11月1日(金)	43名
第2回FD・SDラウンジ 「DX・IRに関する取組紹介と今後の可能性 ～身近なソフトウェア活用からMicrosoft365や生成AIの活用事例まで～」	11月29日(金)	51名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)共通テーマ3参加校合同主催 教学マネジメントセミナー2024 「分野横断の学びを支援する組織・方法・担い手について考える ～文理融合・STEAM教育の時代における新しい学修支援～」	12月9日(月)	170名 (学外公開)
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2024 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月15日(日)	104名 (学外公開)
知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)採択校9大学合同主催 総括シンポジウム 「新しい時代の大学教育につなぐメッセージ ～DP事業が目指し、創り上げてきた成果～」	3月6日(木)	192名 (学外公開)

1-5-3 学士課程・大学院課程の質保証に関連する環境整備

教学マネジメントセンターでは、令和3年度の創設以降、令和4年度に3つのポリシーの一貫性のある見直し、令和5年度にカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備を行いつつ、授業評価アンケート等の学修成果把握のための教学IR環境の整備を進め、その総決算として、「教育の内部質保証に関する指針」を令和5年度末に策定するまでに至った。

令和5年度までに、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備が完了したため、令和6年度においては、大学院教育の質保証にも着目し、従来から継続検討していた大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂、各研究科の専攻長ヒアリングの実施を行った。令和7年度以降は、学士課程・大学院課程に関する一連の教育改革に寄与できるような組織基盤を整えた。

1-5-3-1 大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂

未来創成教育環GS教育企画部「学士・大学院一貫教養教育ワーキング・グループ」における教学マネジメントセンターからの「大学院課程<グローバル>スタンダード」改訂提案を踏まえながら協議を重ね、令和6年7月の教育研究評議会において承認された。

基本的には、現行の内容を踏襲しつつ、一部の内容変更を行いながら、「1. グローバルマインドと明確な倫理的思考」「2. 交渉力・統率力・実践力」の2項目に加え、下記の中教審大学分科会審議まとめ内容などを参考にして、新たに「3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知」「4. トランスファラブルスキル」を加えることとした。具体的な改訂内容は以下のとおりである。

図表6 大学院課程<グローバル>スタンダード改正前・改正後

(改正前)

1. 強固なグローバルマインドと明確な倫理的思考	2. 創造性・交渉力・統率力・実践力
今後、人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力	解決困難な課題にも、革新的なアイデアと粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開拓する能力

(改正後)

1. グローバルマインドと明確な倫理的思考	2. 交渉力・統率力・実践力	3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知	4. トランスファラブルスキル
人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力 《キーワード》 グローバル文化・歴史理解 アイデンティティ ELSI (倫理的・法的・社会的課題)	解決困難な課題に粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開拓する能力 《キーワード》 エンゲージメント リーダーシップ マネジメント レジリエンス	高度な専門性をもって多様な分野を統合し社会を先導できる能力 《キーワード》 高度な専門性 未来知 創造性 アントレプレナーシップ	生涯を通じて、高度な社会課題に関する問題発見・問題解決の場面に適用できるトランスファラブルな能力 《キーワード》 トランスファラブル データサイエンス DXリテラシー AIリテラシー

1-5 教学マネジメントセンターの活動

「大学院課程＜グローバル＞スタンダード」の改訂に伴い、令和4年度から開講している大学院GS基盤科目及び大学院GS発展科目との関係性を明確化したカリキュラム・マップを以下のとおり整えた。

図表7 大学院GS基盤科目及び大学院GS発展科目カリキュラム・マップ

修士・博士前期課程/大学院GS基盤科目に関するカリキュラム・マップ

授業科目名	単位	必修・選択の別	大学院課程＜グローバル＞スタンダードにおける学修目標			
			1. グローバルマインドと明確な倫理的思考：人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個人の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に貢献を遂行する能力	2. 交渉力・読解力・実践力：解決困難な課題に粘り強い交渉力を発揮し、強い読解力と確かな実践力をもって局面を打開する能力	3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知：高度な専門性をもって多様な分野を統合し社会を先導できる能力	4. トランスファラブルスキル：生涯を通じて、高度な社会課題に関する問題発見・問題解決の場面に適用できるトランスファラブルな能力
異分野研究実習Ⅰ Laboratory RotationⅠ	0.5	必修			○	○
異分野研究実習Ⅱ Laboratory RotationⅡ	0.5	必修			○	○
研究者倫理 Research Ethics	1	必修	○			
知識基約型社会とデータサイエンス Data Science in Society 5.0	1	選択必修 1単位			○	○
次世代の先端科学技術 Advanced Science and Technology in the Next Generation	1		○	○	○	
スマート創成科学 Smart Science and Technology for Innovation	1				○	○
イノベーション方法論 Innovation Methodology	1			○	○	
数理・データサイエンス・AI基礎 Mathematical, Data Science, and AI Basic	1				○	○
人間と社会の課題 Human and Social Challenges	1	選択必修 1単位	○	○		○
ビジネス・技術マネジメント戦略論 Strategy for Business and Technology Management	1		○	○	○	○
ヘルスケア・イノベーション Innovation in Healthcare	1			○	○	○
破壊的イノベーションに向けた技術経営論 MOT es for Disruptive Innovation	1		○	○	○	○

博士・博士後期課程/大学院GS発展科目に関するカリキュラム・マップ

授業科目名	単位	必修・選択の別	大学院課程＜グローバル＞スタンダードにおける学修目標			
			1. グローバルマインドと明確な倫理的思考：人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個人の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に貢献を遂行する能力	2. 交渉力・読解力・実践力：解決困難な課題に粘り強い交渉力を発揮し、強い読解力と確かな実践力をもって局面を打開する能力	3. 多様な「知」を融合し、新たな価値を創出する総合知：高度な専門性をもって多様な分野を統合し社会を先導できる能力	4. トランスファラブルスキル：生涯を通じて、高度な社会課題に関する問題発見・問題解決の場面に適用できるトランスファラブルな能力
次世代研究者倫理 Research Ethics for Ph.D. Researchers	1	必修	○			
次世代エッセンシャル実践 Transferable Skills for Ph.D. Researchers	1	必修		○		○
次世代イノベーション開拓 Unleashing the Potential of Innovation for Future	1	選択必修 1単位	○		○	
数理・データサイエンス・AI発展 Mathematical, Data Science, and AI Advanced	1				○	○
国際研究実践 International Collaborative Research for Innovation	1	必修	○	○	○	○
ジョブ型研究インターンシップ Cooperative Education through Research Internships	2	選択	○	○	○	○

さらに、当該スタンダードに関する学修成果の可視化について、大学院学生版学生生活実態調査などの方法で今後対応していく予定である。

1-5-3-2 (研究科) 専攻長ヒアリング (対話型 FD) の実施

令和5年度において、学類長を対象としたヒアリング (対話型 FD) を行うことを通して、各学類における教学マネジメントの実態や文理融合・分野横断に関連した教育活動の工夫等に関する多くの知見を得ることができた。

令和6年度においては、各研究科・専攻における教学マネジメントの実態を把握することを目的とした専攻長ヒアリング (対話型 FD) を企画することとした。本学において重視している大学院教育の質保証のため、近年、導入した QE (Qualifying Exam) 制度、大学院 GS 基盤科目・大学院 GS 発展科目、ラボ・ローテーション制度を含め、コースワークや研究室教育を通じたカリキュラム・マネジメントや学修成果の把握の観点から、ヒアリング調査を実施した。

【調査対象・実施時期】

調査対象：全研究科 (修士課程、博士前期課程・博士後期課程、博士課程、専門職学位課程) の 23 学類

対応者：専攻長及び教務担当教員

実施時期：令和6年5月27日 (月) ～7月12日 (金) 各1時間半程度

【ヒアリング項目】

以下の項目を事前に送付し、半構造化インタビュー形式で行った。なお、以下の項目以外に、「研究科・専攻における教学関係会議」「全学委員会から依頼事項に対する研究科・専攻内での作業系統」「アドバイザー教員、指導教員等を通じた学生支援」のほか、「授業評価アンケート結果、卒業・修了者アンケート結果の活用度合」を聴取した。

- ① (研究科) 専攻における DP・CP の認知度、大学院学生への説明機会について
- ② (研究科) 専攻におけるカリキュラム点検、シラバス点検について
- ③ (研究科) 専攻における専門教育の特徴、強み、課題について
- ④ (研究科) 専攻における研究室教育について
- ⑤ 大学院学生の学修行動、学修成果 (専門性と汎用性) の把握について
- ⑥ 修士研究・博士研究の審査基準、審査体制について
- ⑦ QE 制度等を含めた学士課程と修士課程・博士前期課程の接続、修士課程・博士前期課程と博士課程・博士後期課程の接続について
- ⑧ ラボ・ローテーションの運営について
- ⑨ 大学院学生に対する学生支援、キャリア支援について
- ⑩ (研究科) 専攻における FD 活動について

【ヒアリング調査結果概要】

<教学マネジメント関係>

- ① (研究科) 専攻における DP・CP の認知度、大学院学生への説明機会について
- ② (研究科) 専攻におけるカリキュラム点検、シラバス点検について

大半の研究科では、履修案内 (学生の手引き) において、ディプロマ・ポリシー (DP)、カリキュラム・ポリシー (CP) を掲載している。なお、自然科学研究科のみ、QR コードでの掲載に留まっている。形式的ではあるが、大学院課程における DP・CP の浸透度合いは高ま

っている。大半の研究科において、修士課程・博士前期課程を中心に、入学時のオリエンテーションにおいて、DP・CPに関連した説明を行っている。

また、カリキュラム点検、シラバス点検についても日常的に行われているが、卒業・修了者アンケート結果の共有について、昨年度の学類長ヒアリングと同様に、不十分な専攻が一部見られた。

＜大学院専門教育の特徴、強み、課題＞

③（研究科）専攻における専門教育の特徴、強み、課題について

④（研究科）専攻における研究室教育について

人間社会環境研究科、法学研究科、教職実践研究科においては、専攻としての専門教育の特徴や強みが明確化しており、かつ、履修案内等で履修モデルを明示するなど、きめ細かい配慮がなされている。

自然科学研究科については、企業就職の前提として博士前期課程に進学する学生が多く、博士後期課程進学者の確保に苦慮しているケースが見られるが、機械科学を始め、専門分野として博士人材の不足・必要性を訴えるケースが見られた。

医学・薬学・保健学の各専攻においては、非医学系の学生を受け入れる専攻が存在するなど、多様な学生を受け入れるための専門教育プログラムの魅力発信や広報戦略を着実に進めている印象を受けた。専攻としての専門教育の特徴や強みに関する言語化も非常にスムーズであった。なお、薬学専攻における博士課程入学者増の傾向が見られる一方、創薬科学専攻における医薬科学類との接続を通じた進学者のあり方に課題が感じられた。

新学術創成研究科については、異分野融合や最先端のナノ研究分野など、工夫を凝らしたカリキュラム構成や研究指導体制が組まれているが、博士前期課程入学者や博士後期課程進学者の確保に課題を残している。入学者を学内リソースに依存することなく、異分野融合等の魅力発信を通して、学外からの入学者獲得戦略が期待される。

＜大学院専門教育における学修成果の把握＞

⑤大学院学生の学修行動、学修成果（専門性と汎用性）の把握について

⑥修士研究・博士研究の審査基準、審査体制について

人間社会環境研究科が積極的に取り組む「研究カンファレンス」を中心に、修士研究や博士研究の進捗や学修成果を把握する機会設定がなされている。

自然科学研究科フロンティア工学専攻では、当該専攻の分野横断の特徴を活かして、研究室やコースの垣根を越えた形での大学院生発表会が行われている。

新学術創成研究融合科学共同専攻では、金沢大学・北陸先端科学技術大学院大学の教員が複数指導体制に参画し、幅の広い指導を受けることができる環境となっている。

先進予防医学共同研究科においても、金沢大学・千葉大学・長崎大学の教員が主指導・副指導教員に参画する体制を構築している。

修士研究・博士研究における審査基準、審査体制、さらには、学位審査に至るスケジュールについては、大半の研究科において履修案内またはホームページ等で明示されている。前回の機関別認証評価での指摘に伴う対応は適切に行われていることを確認した。

＜近年の大学院教育改革に伴う対応の現状＞

⑦QE 制度等を含めた学士課程と修士課程・博士前期課程の接続、修士課程・博士前期課程と博士課程・博士後期課程の接続について

⑧ラボ・ローテーションの運営について

QE 制度については、博士前期課程においては、原則として QE で修了することとしているが、修士論文をまとめあげることの重要性を訴える専攻が多く見られた。

ラボ・ローテーションについては、大学院 GS 基盤科目「異分野研究探査Ⅰ・Ⅱ」そのものの趣旨目的の共通理解の徹底や教員の負担感の解消が課題であると感じられた。例えば、全学の研究科を越えた研究交流会のような会にしてはどうかという提案（＝教員の負担を減らし、学生の研究時間の確保しつつ異分野との交流の機会を確保する）があった。

＜大学院における学生支援やFD＞

⑨大学院学生に対する学生支援、キャリア支援について

⑩（研究科）専攻におけるFD活動について

学生支援については、どの研究科においても研究連携協力教員制度が浸透している。

キャリア支援については、主に、自然科学研究科博士前期課程の学生向けに、専攻単位で企業説明会等を行うケースが一部見られる。

FD 活動については、学類と合同で行うケースが多く、大学院教育に特化して実施している事例は、法学研究科法務専攻、教職実践研究科といった専門職学位課程である。この2部局については、専門分野別認証評価等の外部評価が厳格であり、授業評価アンケートの分析、各種FD研修会が相当の頻度で実施されている。

＜その他＞

★大学院教育におけるオンライン授業やオンデマンド教材の有効活用

先進予防医学共同研究科では、コロナ禍を通して、多くの授業をVOD（オンデマンド）化と双方向オンラインで行っているが、オンデマンド率が高いため、最新の研究内容をいかに盛り込むかを議論している。その一方で、社会人大学院生が多い保健学専攻などでは、夜間や臨床業務が増えると両立が難しいという声が多い。また、遠方の学生にはなるべく双方向性のオンラインで対応しているほか、ラボ・ローテーションや大学院GS科目でも対面の科目が多く、社会人大学院生を受け入れる対応を検討する必要がある。医科学専攻・医学専攻は合同のオンライン説明会を行ったところ、例年を大きく上回り、海外からの参加も見られた（＝社会人大学院生の受け入れに向けた広報と制度設計）。

★博士進学増の課題

本学の大学院教育のボリュームゾーンは自然科学研究科であるが、企業就職目的に博士前期課程に進学してくる学生が大半を占めている。学類の2・3年次に博士進学を動機づける機会設定が必要である。例えば、薬学類では、1年次における博士進学者による講話に留まらず、2・3年次におけるキャリア形成科目を学士課程教育のカリキュラムに組み込んでいる。このような事例を参照すべきである。

1-5 教学マネジメントセンターの活動

1-5-3-3 各学域・研究科における教学マネジメント・FD 活動の連携支援

令和 5 年度の学類長ヒアリング及び令和 6 年度の専攻長ヒアリングを通して、各部局における教学マネジメントの実態を把握することができたことに伴い、教学マネジメントセンター側からの連携支援を行いやすい環境を整えることができた。このような環境整備の下、教学マネジメントセンターが中心となって企画実施している全学 FD 研修会について、令和 6 年度までは、知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP) に関連したテーマで企画実施するケースが多かった。令和 6 年度で同事業が終了することから、令和 7 年度以降の全学 FD・SD 企画等の事項整理を行った。

【具体的な方向性】

- センター運営経費を財源として、全学 FD・SD 企画等を行うことを基本とするが、各学域主催の FD 研修会等との連携を強化していくこととする。既に、各学域・学類等と連携した FD 研修会等の実績があり、これらの実績を基礎に各学域・学類等での FD 活動を支えることに軸足を置いた取組を進める。

(これまでの各部局との関係性・実績)

融合学域では、教学マネジメントセンター教員が講師となった FD 研修会、ベネッセ i-キャリア職員が講師となった FD 研修会の実施実績があり、同様の連携を継続する。

人間社会学域では、本年 12 月開催の学域主催 FD 研修会にて、教学マネジメントセンター教員が講師を務めたことを契機に、同学域・学類とのチャンネルを強化する。

理工学域では、令和 4 年度より、理工・自然研 FD シンポジウムの企画に教学マネジメントセンターが携わり、令和 5 年度より、本センターが共催して実施している。令和 6 年度も同様に実施予定で連絡調整中であり、今後も同様の関係性を維持する。

医薬保健学域では、令和 5 年度より、医学教育研究センターとの連携を図りカリキュラム委員会に参画するほか、令和 6 年度より、医学類フォーカスグループインタビュー支援などに取り組み、医学教育の質保証の関わりを強めており、今後も、医学類を中心に、同学域・学類との連携を維持する。

- 全学 FD・SD 企画等において、時機に応じた設定テーマに沿って、各学域・学類に 出向き、20～30 分程度のコンパクトな話題提供や意見交換を行う FD 機会の確保に努める。
- 現在、委嘱しているセンターアドバイザーについては、センターにおける FD・SD 企画等において必要な人材であり、来年度以降も継続委嘱することとし、本学の全学 FD・SD 企画等における支援を受ける体制を維持する。
- 数年に 1 回の頻度で、学類長や専攻長を対象としたヒアリングを行い、学位プログラムレベルの教学マネジメントに関するレビューすることで、教育の内部質保証に役立てる。
- 大学コンソーシアム石川教職員研修専門部会に提案する本学主催の FD・SD 企画について、大学コンソーシアム石川加盟機関にとって効果的なテーマを提供できるように努める。

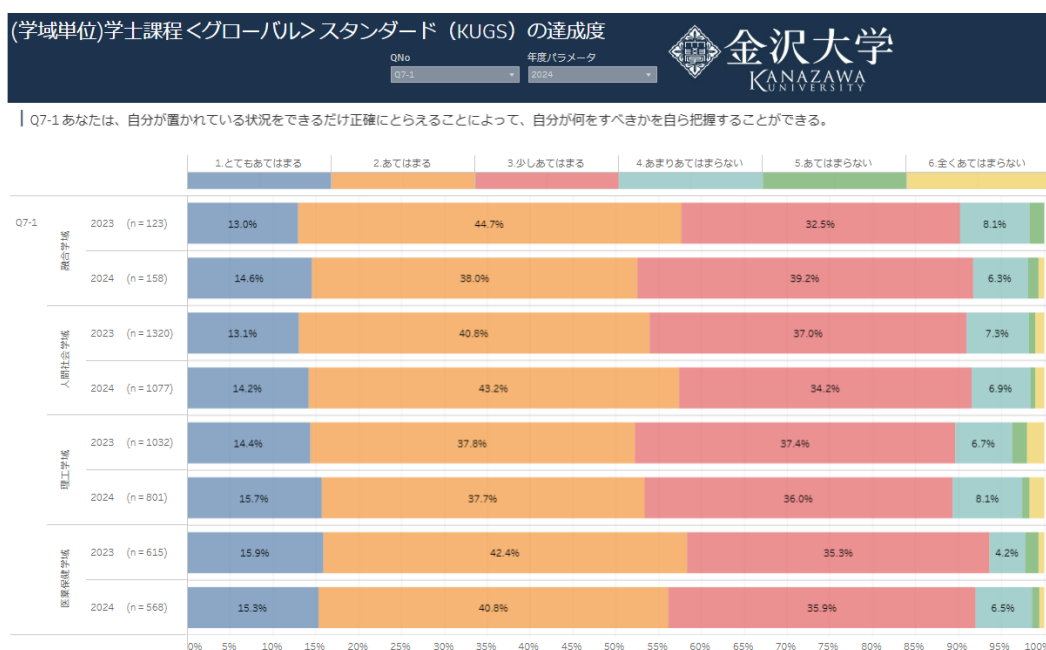
1-5 教学マネジメントセンターの活動

1-5-4 教学 IR 環境整備

令和3年度に、教学マネジメントセンターが中心となり、授業評価アンケートにおける共通設問化、卒業・修了者アンケートにおける学生生活満足度の設問の統一化を行うとともに、当該結果の集計を教学マネジメントセンターで行う環境を整備した。

令和4年度から令和5年度にかけて、FD委員会を通して、当該集計結果を各部局にフィードバックする環境を整えるとともに、FD活動報告書における当該集計結果概要を掲載、さらには、教学マネジメントFACTBOOKの刊行にまで至った。

BIツールのTableauを活用し、授業評価アンケート及び卒業・修了者アンケート集計結果のダッシュボードを整備し、教学マネジメントセンター「教学IRダッシュボード」と称して、学内外に公表している。令和6年度には、新たに、学士課程<グローバル>スタンダード達成度の可視化を追加整備した。以上により、授業科目・学位プログラム・大学全体レベルに関する代表的な学修成果指標のダッシュボード化を完了することができた。



図表 8 学士課程<グローバル>スタンダード達成度可視化ダッシュボード（一部）

1-5-5 全学教育・国際共修機構の創設

全学の教育改革・教学マネジメントの確立を実現し、その中心軸を「学修者本位の教育」へと転換させるべく、令和4年4月に学長の下に「未来創成教育環（以下「教育環」という。）」を設置した。教育環は、本学教育改革の抜本的飛躍を担う組織として、未来創成を牽引する金沢大学ブランド人材の育成・輩出に向けた取組を推進している。

さらに令和7年度には、新たな全学横断型の教育組織として「全学教育・国際共修機構」を設置予定であり、教学マネジメントセンターは同機構の中に位置付けられることになる。同機構は、教育環が掲げる「自ら学び、自ら育む」教育環境の構築を継承し、グローバルイノベーションキャンパスの実現に向け、学士課程から大学院課程に至る一貫したリベラルアーツ教育を充実させるとともに、本学の更なる国際化を見据えた国際共修を強化・推進していく。

教学マネジメントセンターについては、新しい組織体制の下、引き続き、学士課程・大学院課程に関する一連の教育改革を支え、FD・SD 活動、教学関係に関する学生調査の実施・分析、3つのポリシーに基づく教育の内部質保証の充実、認証評価対応に取り組む。